

学歌の正誤訂正について

年史編纂委員会

百二十周年直前に分かったばらつき

現行の関西大学学歌の成立とその沿革については、『關西大學創立五十年史』、『關西大學七十年史』、『同百年史』をはじめとする多くの記録や出版物に記載されているが、印刷物をはじめとする各種のメディアが大量に再生産されるたびに、歌詞の一部や楽譜の音程が変化してきた経緯がある。元来、オリジナルは唯一のはずであるが、現実には幾つかの誤りを持ったままの印刷物やCDが出版されていた。

そこで、関西大学が創立百二十周年を迎えるに先立ち、学園歌全般を、主として歌詞を中心にオリジナルと照合

し、誤りを事前に訂正して統一することが望ましいといふことが年史編纂委員会で話題となり、本委員会では年史編纂室が所蔵する原資料に照合して調査をおこなった。

その結果、平成十五年三月、年史編纂委員会において、学園歌を印刷する際に版下としても使用できる印刷原版（清刷り）を「定本」として作成し、これを広く関係先に配付したのであった。周年記念事業・行事を控えて、学園歌が多くの機会に歌われるであろうことを想定し、ばらつきを未然に防止して統一を図ろうとの意図によるものであった。このことは、平成十五年五月十五日発行「関西大学通信」第三〇八号に掲載された。

こうして、記念の百二十周年を越えたのであるが、さ

らに、継続的に原資料との照合を進めた結果、現在、広く巷間で歌われている関西大学学歌楽譜の主旋律の音程が「カ所、誤ったまま今日まで伝えられていることが発見されたのである。

現行学歌の誤りはどこか

現行学歌の楽譜の誤りは、主旋律譜第二十三小節第三音節にある。「ソ」であるべきところが「ラ」になっている。この結果、「たたーえなん」（第一節第六聯下句）を「ラソラソレソ」と歌うべきところが、楽譜は「ラソララレソ」（いずれも二長調）となっている。

この誤りの初出を年史編纂室資料でさかのぼると、昭和二十七年に大学が発行した『關西大學學報』付録にたどりつく。學報本誌と同寸のセピア色で印刷されたB5判四ページの楽譜と歌詞であるが、ここに誤りがあったことが判明した。おそらく、それ以来、ずっと誤った譜面が種々、大量の出版物に掲載されてきたものと推測される。

次の問題は、この誤った楽譜は、果たして昭和二十七



SPレコードの歌詞カード、本体、ジャケット

年が初出かどうかであるが、現時点ではこれ以前の印刷物には見当たらない。このように、いつから誤ったかについては不明であるが、いくつかの推測は可能である。

先に、校友の寄贈による、当校友の父親が昭和六年に買ったと伝えられる日本コロムビアレコード（当時）製造のSPレコード（表Ⅱ音盤製作番号二六五一〇A（四



日本コロムビアレコードが昭和6年に製造したとみられるSP盤のラベル（A面）

一三二五）、裏＝二六五一〇B（四一三二六）が年史編纂室に保存されている。そこで、製造番号を頼りに同社（現在の日本コロムビア・ミュージック・エンターテインメント）に照会したところ、このナンバーを含む二六四八八から二六五一一までの二十四面のレコードについては空番扱いとなることが判明した。その前後にあたる二六四七〇から二六四八七および二六五一二から二六五二九は、いずれも昭和六年十月二十一日発売の記録が残っているということであった。本学保存分を含む空番の音盤は、ひよつとすると「試作廃盤」の運命をたどったものかもしれない。

ちなみに、このレコードでは、山田耕筰が作曲したとおりの音程で歌われている。したがって、間違いが生じたのは、昭和六年から昭和二十七年の前記『關西大學學報』（付録）で誤表記されるまでの間に絞ることができると。二十年そこそこの間のこともいえるが、およそ、次のようなことが想定される。

はじめは正しい音程で歌われていたものと考えられるが、口伝による継承を繰り返す間に、歌い易い方向に自

然に転化して「ラソラレソ」となってしまったのではないかと思われることである。したがって誤った楽譜が全学生に配付されたことが動機ではなからう。このメロディはなかなかの難曲だといわれるだけあって、この抑揚は自然に「ララ」と同音程を続けるほうが平易で、楽な方向に定着したものとみるのがごく自然ではなからうか。楽譜の誤植は、単純ミスか、当時の現状追認のいずれかだが、まず前者と思われるものの、今では分からない。

結論は、現行学歌の主旋律の一カ所にあった音程の誤りが温存され、慣習的に長く誤って歌い継がれ、今日に至ったことになる。

学歌のテンポは「♩＝112」か

学歌の演奏速度については、山田耕筰の作曲原譜（遠山音楽財団に保存されている作曲者・山田耕筰自筆原稿）のコピーが年史編纂室にあり、それで確認したところ、山田が書いた原譜面にはなく、それから清書されたと見られる手書きの楽譜に初めてイタリア語で「Tempo di

marcia. (マーチのテンポで、)「改行」*molto energico ben marcato* (非常に力強く、明瞭に)」と記入されている。この手書き楽譜が版下原稿として、そのまま印刷されて『千里山學報』第四号（大正十一年十月十五日発行）の附録として配付されたのであるが、そこには当然、テンポを画的に♩＝112とは指定していない。これが確認されるもつともオリジナルに近い（そのもののコピー）内容である。

一方では、最近、巷間で歌われる学歌のテンポがいたずらに遅くなっていることが指摘された（注・平成二十年六月二日、当年度第一回年史編纂委員会において森本靖一郎委員から指摘）。

これに関していえば、「Tempo di marcia」と指示したうえに、重ねて具体的に「♩＝112」と数値を特定して併記するとは考え難い。山田耕筰は、この学歌がスポーツ応援等に及ぶ多くの場で広く演奏されるよう期待していたことを考えると、テンポを数値で固定するような考えは毛頭なかったと考えるべきであろう。現存資料に限定されるが、昭和二十七年発行の『關西大學學報』（付録）

テムに訪問した。氏は来春早の多忙中を種合せて一同の會見、長い鐵路の疲れも厭はず敬虔な態度で、本學學歌作曲の感想及び歌曲の詳細な説明をされた。氏は更に自らピアノに向ひ、各節毎に主唱伴奏の範を示して、親しく部員を指導せられた。対樂奏の宮島理事、作歌者たる服部教授も、圓熟せる氏の伴奏が語る豐滿な藝術味と無上の感激に滿されて、今更の如く、氏の作曲により祝福された學歌



・君新木眞・事理島宮 らか右てつ向
・櫻教館服・兵作耕田山・君治時野中
君一政東辰・君剛中山・君助之夏村中

を噴美せられた。ここに山田氏に對し、當夜の御懇切な御薫陶を謝し、且つかかる大家の温容に接して、快い音楽の夕べを送る事の出来た幸福を特記し、同夜の眞實と共に長く音

樂部の記念としたい。終りに氏の垂示された學歌に對する注意事項を描記して、諸子の參考に供へる。



(一)學歌は、大體二種の場合に歌はれる。

一は式場に於て歌詞の含む意を、音樂により一層美化し、高調するもので、其の内には嚴肅、壯大の心情に雅麗なる曲調を保有せねばならぬ。他は運動競技の場合に、學生が相聚り、大學の優秀、堅實を内に誇り、額を外に聲明するに際し、感動を深めならしむ可く、音樂の力を藉るのである。作曲者の苦心の存するはこの點であつて、この學歌は以上何れの場合に聽いても、最上の權威たらし

めるやうに苦心したのである。式場では嚴肅に、運動、散步、廬足の時などには輕快に、調子をせめ強めて、マーチソングと

本曲に學者も、かゝる(一)歌曲は、歌詞の有する音律を自然且つ靈妙に音樂化する。これには各節の應答部が調和せね



君 諸 員 部 樂 音
は 日 二 ち 右 向 段 下
氏 男 士 典 小 間 部 樂 音

ば、同一曲を以て全部を完全に表現し難い。又同一歌詞でも、單に歌むの歌ふのミでは感じが大幅違つて来る。この學歌は音律は整へてあるが、各節に對應する各語のアクセントが調節されてないので作曲で十分補正はしたが、表現に缺けるところがあ

る。故に、發想、發音、音程等を忠實に守られて、此の非難を出来るだけ少くする事を心掛けられた。
(三)和聲は、藝術的音樂として甚だ必要である。從つて伴奏は、極めて重要な地位にある。伴奏樂器としてピアノを用ひるが、大勢の合聲、殊に音樂的訓練の乏しい場合には、ややもする三伴奏が全體をリードせねばならぬ破目に入る。屋外の時は殊に甚しく、各人の音聲は區區になり、不統一になり易い。是が救濟として、ピコロを以てメロディーを吹奏して強く牽制し、サイドドラムを以て、強弱位に拍子を整へる事にし

たい。此の方法は最も簡單で、而も效果が多く、又上品である。是非實施したいものである。通過であるから、是非實施したいものである。
(四)學歌を歌ふについての全體の心得は次の如くである。

〔注〕若干読み辛い、ここには山田耕祥の学歌歌唱指導時の注意事項が記されている(次ページに続く)

(レ)シモノペーシヨは明瞭に、だれの様、其の妙味を發揮する事。

例。途 純正の(オ)に注意

(オ)天濤の空想法として、自然の「以下は平氣で静しく、此の學園」は精緻やかに、

飛等立つ「以下は元氣よく其の快活に、麗なる」は特に強く、

理想を「以下は稍滑稽に、關西天舞」第一、第二、第三に注意し、

特に三度目のかにに注意、

附關西甲種商業學校彙報

第八回卒業式

本校第八回卒業式は、三月十七日午前十一時から第一講堂に於て舉行されたが、式は例年の如く知事、市長を初め在阪名士多數の臨席を尊うして頗る盛大であつた。

因に卒業生總數は百三十名で、その志望別及び優等生は左の如くであつた。

高等專門學校に進むもの 約五十名

志望別 會社銀行及び商店に就職の者 約四十名

自家營業 約四十名

優等生 柳 儀三 廣澤長藏 柏原庄三郎

清水一郎 船田夏之助 成見五郎

入學試験及び入學式

本年度入學試験要項左の通りであつた。

三月三十一日

作文(至前八時四十分) 係員 室石教諭

算術(至前九時四十分) 係員 宮崎教諭

長き歴史「逐漸的に強く軽く區切る。

第二、三節之に準ず。

(五)なほ、關西大學を三回繰り返しておいた

毎に何か應答的の歌聲を入れて聲支ない。

カンサイ・ゲイガウミ・ゲイガウミ・ゲイガウミ

レ、A・B・Cミ・ゲイガウミ、次のカンサイ・ゲイ

ガウミを歌つた後更に、フレ、フレ、

A・B・Cを繰り返して、最後に三度目のカ

ンサイ、ゲイガウミを勢よく歌ふのである。(中村生記)

算術(至前八時四十分) 係員 引野教諭

國語(至前九時三十分) 係員 中村兩教諭

四月二日 口述試問(至前八時四十分より)

四月三日 體格検査(至前八時四十分より)

四月五日 入學許可者発表(午後一時)

尚ほ二十名の新入生に對する入學式は去る

七日午前九時から講堂に於て舉行、垂水主事

は保護者に對して鄭重な挨拶を試み、入學生

には懇切な訓示を與へて式辭にかへ、小泉教

務主任は一場の所感を述べて閉式、式後、黒

川、白石、室石の各擔任教諭は教室に於て種

種注意を與へる所があり、新入生は歡喜に充

ちた忘れ得ぬ新入の印象を留めて、滞りなく

よき入學の日を終へた。

教諭 新任

今回生徒監督兼體操科教諭として陸軍歩兵中

で初めてこの併記が確認されるのであるが、この付録楽

譜は、ここでも過ちを犯していたことになる。ただし、

現在、巷間で歌われている学歌のテンポは、森本委員の

指摘のとおり、ずいぶん遅くなつていて、やはりテンポ

の改善は必須である。そこで、オリジナルに忠実に整理

すれば、具体的なテンポの数値指定はできないまでも、

幸い、大正十二年二月、作曲者が歌唱指導で來学した際、

指導した内容が具体的に詳しく記録として『千里山學報』

第八号(大正十二年四月十五日発行)に残されているの

で、それを効果的に活用して、テンポの低下防止策を講

じるべきことを付記しておきたい。

学歌の置かれた現状

多くの学園歌のうち、学歌が制定されてから九十年を

経た今日まで、むしろ、学歌がここまでオリジナルに近

い形で継承されてきたのは珍しいことかも知れない。万

国共通のルールとしての五線紙の楽譜があるとはいへ、

事実上、口伝を主流として受け継がれてきたわけである。

『關西大学七十年史』では歌詞が「人生の曙に」とあるべ

きところが「人世の曙に」とばらついたり、「燦たる理想」(正)が「燦たる理想を」(誤)と格助詞がついてしまふなど、歌詞の小さな誤りも散見される(注・本件は平成十二年七月十九日開催、当年度第十一年史編纂委員会において神堀忍委員から指摘され、すでに訂正済み)。

しかし、新たに発見された学歌の音程の一方所、1音高い誤表記は温存されたままであり、これが、年史編纂委員会(平成二十二年六月三日開催、平成二十二年度第一回)が、小委員会(平成二十二年七月二十七日開催、第一回)を開催して調査、確認した結果である。

残る問題は、学歌の楽譜を、いつ、どういう方法で訂正し周知するかである。これについては、できるだけ速やかに正しい楽譜に訂正するに越したことはないが、年史編纂委員会(平成二十二年十月一日開催、平成二十二年度第二回)で検討した結果では、関係各界への余波に配慮して慎重に扱うべきことと、訂正にかかわる諸手続きとその実行は、大学、法人が中心となって広報や学生サービス等の関係部局が協力して推進するのが望ましく、

年史編纂委員会の守備範囲を越えるという見解が大勢であったことを述べておきたい。

したがって、年史編纂委員会としては、この誤った現状を、誤記発見にいたる経緯とともに委員会の記録として本年史紀要にとどめることにしたものである。